

sacrament に見るアメリカの風土と教育

Striana De Costa

主筆 園遊客工

附属学校部 柴原健児

昨年10月19日から11月12日の国立大学・学部附属学校教官海外教育事情視察派遣団に加えてもらうことができた。この団の主な視察国(地)はアメリカ合衆国(サクラメント)、チェコスロバキア(ブルノ)、ドイツ(ハイデルベルグ)である。時代の転換期であり、どこもそれぞれ印象深かったが、ここではサクラメントを中心に書いてみたい。

サクラメントとの出会いは、私が居住する安芸郡熊野町の海外移住者(出稼ぎ者)を調べているときからである。アメリカではこの地とその周辺への移住者が多く、明治30、40年代には日本人の集団生活(キャンプ)が行われていた。土地所有者に雇われ、決められた仕事をする農業労働者だったのである。その当時、この地を訪ねて移住者のあとをたどり、生活の場を調べてみたいと思ったものである。また、サクラメントを州都とするカリフォルニア州はアメリカ第一の教育州でもあり、私の教科である社会科でもカリフォルニアの諸大学の協力で作り上げた略称タバ社会科カリキュラムなどがあり、地理や歴史の教材としてのカリフォルニアとともに一度はその風土を味わってみたかったところでもある。

サンフランシスコよりベイブリッジを通り、オークランドを経てサクラメントに入る。途中、枯れ草におおわれた小山に数10頭の牛が草を食んでいる風景をいくつか繰り返すうちに海岸山脈を抜け、アンズらしき果樹園が見え始める。そこはサクラメント川の流れるセントラルバレーである。この時期、目立つ作物はなかったが、広い畑地が続く。彼方に海岸山脈が見えるようになる。バスの走る80号線との間には広大な土地を区画するかのよう

に並木が遠くに近くに3列延々と続いている。米、トマト、砂糖大根、とうもろこしなど多くの作物が、アメリカ第一といわれるのもなるほどと思える。

ホテルのある観光地のオールドサクラメントは古いアメリカをそのまま残していた。大陸横断鉄道はここで工事が始まった。そこには州の歴史鉄道博物館がある。サクラメントに初めて居留地を作ったスイス人サッターが1839年、サクラメント川から上陸したのもここ。玉石で舗装された道路を観光馬車が走る。歩道は古い板を敷き並べている。その木はカリフォルニアオークとやら。原生林がこの木だったそう。車で行き来するこの町はパリに次ぐ森の街といわれるだけあって確かに樹木が多い。木には実がなっていてあちこちにリスがいる。自分の体以上に大きなしっぽを丸くして芝生からこちらを見ているのもあきょうがある。

サクラメントの住宅地には古い優雅な住宅とモダンな住宅が共存していた。ともに家の前の芝生が広い。前者の例がオールドサクラメントの東にあるダウントウンである。ピクトリア朝風の凝った作りの住宅が並ぶいくつかのブロックがある。レーガンさんがかつて住んでいた州知事公邸もそのなかにある。後者の例が私たちがバーベキューパーティーに招待されたサクラメント郡の教育長の家である。郊外にあることもあって、平屋で前の芝生も広く1,200坪あるという。裏はちょっとした森。その中に芝生とプールがある。プールといっても広いタイル張りの池のよう。子どもは姉と弟(9才)の2人。飼われている動物は熱帯魚、インコ、犬、猫、うさぎ3匹、

山羊。

『食事はお決まりのワイン、ジュースやコーラ、野菜サラダ、パン、ビーフ（自動車で運んできたオープンで、専門家が家の前庭で焼く、あぶらみの少ない牛のランプ肉）。

私たち30人のほか、教育庁の人が10人くらい同席していたが、たっぷりごちそうになって半分以上残っていた。デザートも3種あってどのケーキも大盛り。私はストロベリーの1つで、堪能してしまった。欧米人のパーティーについては本ではよく読むが、初めて体験。学校教育のこと、ヨーロッパ系やアジア系の人とはルーツについて、また戦争や原爆についても、カタコトの英語で語り合う。

この家の子ども達はビニールの袋を持って汚れた紙の皿を集めに回るなどすべてにわたって仕事を分担していた。家の大部分を解放して気軽にもてなすことのできることにあらためて感激する。

学校訪問の前に郡の教育庁であいさつ・説明および全庁内の案内を受けた。州では公立学校に活力を与え、理解しやすい学校にしようとする努力をしていること。適切な教育手段や資料を用いて優れた学校にしようとする先生を配置していること。全州にわたって協力し、教育課程の改善、優れた教師のスカウト、校長の再訓練、試験法や教科の改善を行い、父母、業界、地域社会の、学校改革への参画を努力しているという。どの表現もアメリカ人らしい発想、言い方だと思う。庁舎内は行政事務関係のほかには6300人の生徒のための本、フィルム、VTRなどが用意された図書サービスコーナー、ライブラリーリストは618Pの分厚いものでアルファベット順と項目別の2つがあり項目はさらに細分化されていた。自由に教材を作って持ち出せる make and take out サービスコーナーもある。日本流に教材室とか準備室とか呼ばないのがおもしろい。モットーは「先生方の時間を節約させるため」といっている。take out コーナーの利用者は1日に50人程度だという。視聴覚の設備も整い保守と整備の2人の常駐の職員がいた。



最も楽しみにしていたのは学校訪問、30分ほどでサクラメント市北東のサンジュアン統一学校区（幼稚園から12年生までの共通の学区）にあるミッション・アベニュー・オープンスクールに着いた。幼稚園（年長）から6年生までの7学年あり各学年2組である。ここでは学校独自のカリキュラムを組んでいる。他に視察の対象になった小学校はグリーン・オーク・ファンダメンタルスクールとジェファソン・エレメンタリースクールがあった。オープンは創立1954年、ファンダメンタルは1960年、エレメンタリーは1988年の創立であり、それぞれ時代の要求を受け止め理想と哲学をもって設立されている。ここのオープンスクールはひとつのテーマをもとに単元を構成し、（今年はソ連からの子どもがいたので「ソビエト連邦」が単元）その中で合科的授業をしていくのである。子どもは自分の教室をもっていない。理科と国語では入れ代わる。2人の担任はそれぞれいくつかの専門教科を持っている。生徒はグループを作り10枚くらいの問題用紙を自分のペースでやっている。スピードのある生徒もそうではない生徒がいても先生はかまわない。子どものタイプによって学び方が違うのである。ほかにも全体、グループでの授業もあったが。女性の進出はすばらしい。この学校では校長をはじめほとんどが女性。男性は用務員さんや、退職して臨時に教師をしている人などである。もう一つの小学校でも11人が女性、4人が男性、2つの高校でも34人と32人、35人と28人である。

そういえば郡の教育庁で接した人達の中でも教育長を除いて多くが女性であった。ボスの存在であるかのような州の教育委員も、博士号を持つ指導主事も……。しかも送り迎えはすべて自家用車だったが、私たちを運んでくれたのは60代の日系の女性、しかも広島県吉田町にゆかりがあるとのこと。3,000CCクラスのオールドモービルで片側5車線のフリーウェイ、そばを大型トレーラーが並走する。法規制55マイルを60マイルで飛ばす。

3校の中学校はともにミドルスクールであり、2校が1963年、1校が1964年の創立である。日本が手本にしたジュニアハイスクールは生徒の問題行動の増加とともに対応できなくなり、この年ごろの子どもの独自性を見直す教育が必要となり、2年間(7年生、8年生)のミドル中学校ができたのである。規模を生徒数で表すと、3校とも800~1,000人の枠の中である。適正規模をここにしているらしい。

昼食が用意されており、その間、日本や韓国・台湾の子ども達がピアノ演奏で歓迎してくれる。海外出張組の子弟で、ここにも日本の企業が進出しているのを知る。2人の日本人のお母さんも、私たちのためにボランティアで学校にきてくれていた。

校内を案内してくれたのはアフリカ系とメキシコ系アメリカ人の2人の中学生であった。とてもいねいで親切。女の子は口紅を塗りイヤリング(ピアスか?)をしている。さり気ないおしゃれがかわいい。服装はクラスで共通の課題を討論するときは共通のTシャツを着るといふ。この日も討論があったのか、全員、同じTシャツを着ていた。

学校の規則は2種類ある。「一般的規則」には教室でチューイングガムをかむのは許されないなどがある。一方、この中学校で「期待される生徒の行動」として9か条があり、その1条は始業ベルの鳴る前にロッカールームに着いておくこと、とある。停学および退学になる理由がプリントされ、親にも周知徹底されている。両親そろった子どもは少ないのだが。例えばアルコールやそれに類した飲料

での違反は、第1回目は5日間の停学と親の呼び出し、2回目は5日間の停学と適当な課題の付与、そして3回目以上は5日間の停学と退学への忠告と記されている。ドラッグについても同じである。興味深いのは人種、民族、宗教、障害、性についての中傷について、1回目にして1日の停学と親の呼び出しがある。これらにもし違反した結果、停学や退学になってもそれはIt's Your Responsibility「あなたの責任」なのである。

サクラメント郡の高校は4年制。見学したどの学校も白人が4~5割、あとはアフリカ系そしてメキシコ系、アジア系とくに東南アジア、その中でもフィリピンが多かった。地域の人種別の人口構成を反映させようとしている。学区はそのための配慮であろう。黄色いスクールバスが学校の前に何台も駐車していたのも、そのことが理由の一つである。

高校も歴史と英語、理科と数学というように抱きあわせて授業が進められている。しかも90分を2つに分けて45分ずつ教室を入れ替わりそれぞれの先生が授業をしているようだ。高校は2人の先生がいて一人はアシスタント。(中学校は生徒がアシスタント)技術の授業では30人くらいの中で一人の女の子。この高校では大学にいても職場にいても人に負けないような経験と実力がつくように、を目的にしていた。教室も、そして学校の事務室も昨日の教育庁もコンピューターが目立った。

サクラメントの教育界すべての人が、胸にDRUG FREEと赤いリボンをつけていた。ドラッグがとても多いそうで、それぞれの学校にはドラッグ担当の教員がいるのである。

校内の各所には大きなドラム缶が2個置いてあり、リサイクルでアルミ缶、紙と分別収集をしていた。街中のゴミは日本よりもずっと少なくきれいである。街の各所にゴミ入れが置いてある。

旅行中、家族のもとに毎日手紙を送り続けた。そのうちの2通をもとに、少し手を加えたものである。カリフォルニアワインを一人飲みながら書いていたことも思い出している。